



2020年(令和2年)
9月号(No. 904)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

「孤高の旅人」菅江真澄と 白神山地・暗門の滝への道

根深 誠

「人に歴史あり」と言われるが、人と人を結ぶ「道」にも長い歴史がある。本会創立120周年記念事業として「全国山岳古道調査」が企画されているが、その広報も兼ねた寄稿第1弾として、津軽の山野を跋涉した菅江真澄の足跡を紹介する。筆者は白神山地を守り、世界自然遺産登録に導いた、弘前市在住の根深誠会員。

採葉係として山野を跋涉

菅江真澄は江戸時代後期の遊歴文人であり、ひたすら諸国を歩いて書き続け、ついには故郷へ帰ることのなかった「孤高の旅人」として知られている。今の言葉で言えばフィールド・ワーカーであり、その元祖と言っていいかもしれない。

ごく簡単に掻い摘んで述べれば、宝暦4(1754)年、三河国(現・愛知県)に生まれ、30歳で故郷を立、文政12(1829)年、秋田で客死。76歳。この間、旅に殉じた47年にわたる紀行は、『菅江真澄遊覧記』に網羅されている。信濃から出羽、陸奥、蝦夷地など各地を巡遊し、土地の人々との交流を深めつつ山にも登っている。

目次

「孤高の旅人」菅江真澄と 白神山地・暗門の滝への道	1
ウェストンの著作と写真撮影者	4
平出・中島コンビ再びピオドール受賞	7
JAC本部の図書室は〆宝の山、	8
全国山の日協議会との連携深め 運動のすそ野を広げよう	10
さんけん通信	11
会員名簿を発行します	12
「入会申込書」が新しくなります	12
支部だより	13
越後支部／東九州支部	
新入会員	14
図書紹介	15
図書受入報告	17
会務報告	18
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
★新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日13時～20時

名の知られた山では道南の有珠山、下北の恐山、津軽の岩木山、男鹿の寒風山、阿仁の森吉山、秋田の太平山などが挙げられる。山頂を極めていない山を含めると、ほかにもたくさんある。

また、登ること以外に薬草採取を目的に各地の山野を跋涉している。とりわけ津軽弘前藩では、6年半滞在した間に採葉係にも命ぜられて山中に分け入り、結果的には、外部者として藩の内情を知り過ぎたからではないかと推察されているのだが、その紀行は押収され、なかば追放されるように秋田へ去った。

のほどはともかく、話としては面白い。
我が国初の世界自然遺産で知られる白神山地には、知られざる鉱床があつたようだ。私の知人で明治生まれのマタギの古老は生前、場所是谁にも教えられないと断わった上で、黒鉱のある場所を知っていると私に話したことがある。沢床に層をなしていて、見れば分かるそうだ。
鈴木忠勝(1907～1990)というマタギだが、四季を通じて山中の杣小屋で生活し、白神山地の核心部一帯を熟知していた。私の白神山地に関する知識のほとんどは、鈴木忠勝マタギからの受け売りである(詳しくは拙著『白神山地マタギ伝』(ヤマケイ文庫)を参照されたい)。



新緑の樹間越しに眺める暗門第2の滝

「秘境の名瀑 暗門の滝」

青森・秋田の両県に跨る白神山地は世界自然遺産に登録される以前、ブナの森林資源でもあることから林道建設による伐採の危機にさらされ、全国的な反対運動の舞台にもなった。「白神山地」という山地名は、そのとき青森県側で林道建設に反対する保護派によって使われた山地名であり、それが運動とともに全国的に広まった経緯がある。

それ以前は、目屋という地名を冠して単に「目屋の山」と呼ばれていた。菅江真澄も岩木山に登って白神山地を眺望したとき「南は目屋の山々が雲のきれ目、きれ目にあらわれ」と書き記している。

目屋の奥地は白神山地の山懷に

位置し、西目屋と呼ばれていて真澄は寛政8年、9年、10年と3度にわたって足を運び、それぞれ『雪のころ滝』『津軽のをち』『外浜奇勝(三)』と題する紀行を著わしている。なかでも『雪のころ滝』と『外浜奇勝(三)』には、当時、津軽地方で「秘境の名瀑」と謳われた暗門の滝を探訪した様子が描かれている。

真澄が最初に暗門の滝を探訪したのは寛政8年11月1日、西暦だと1796年11月29日。冬を迎えていた。『雪のころ滝』がそのときの紀行である。

《路のない雪のうえを行き悩んで「もうしばらく、もうすこし」と案内人や友と語ってゆくほどに、狼がでてきたようなので耳をすました。(略)雪に手をつき、梢をふんで、のぼったりくだったり、さらに奥山ふかくはいり、岡市・籠の沢をおりていった。》

引用文にある「岡市・籠の沢」は「おかいちこの沢」と読む。現在の

「妙師崎沢」に相当する沢で、「おかいちこの沢」はその上流右岸に流入する支流を指す。「妙師崎沢」と「おかいちこの沢」の沢名が逆転した理由は定かでないが、真澄が暗門の滝を探訪した当時、つまり旧藩時代の「目屋野沢御山絵図」を見ると、真澄の記した沢名と合致する。

要するに、真澄は現在の「妙師崎沢」に降り立ち、沢沿いに下って暗門の滝の落ち口から下方をのぞき見たのだ。『雪のころ滝』に、そのあたりの様子がこう記されている。

《この左手の高い山の岸に生い茂っている小笹をつかみ、木々の根もとに足をふみしめて、雪のなかに立って、身を縮め、冷汗をかくような心地でかろうじて見下し、その高さはどれほどかと、おおよそ推しはかったが、百尋はこえていであろうと思われた。ただただ、水が天から中空にくだるようである。》

口伝として伝わる真澄の足跡

かつての秘境の名瀑・暗門の滝も、現在は世界自然遺産・白神山地の観光スポットとして一躍注目

され、暗門川沿いに遊歩道が開設されて人気を博している。暗門川は集水域も広く、源流が岩場で切り立っていることから、昔の杣人の間では「雨が降ったら入るな」と言われていたほど増水、鉄砲水が発生しやすく、危険視されていた。こうした危険性は観光化された現在も変わらない。

昔の杣人はそのため暗門川沿いを避けて、真澄がたどった山中の杣道を森林伐採や山菜採取、狩猟などで山を利用する際に使っていた。真澄の『遊覧記』にはそうした杣人の暮らしぶりが活写されている。

真澄は冬の暗門の滝を眺め下ろした後、その足で「ふがけ沢」にある木こりの杣小屋に泊まっている。「ふがけの沢水と岡いちこの沢水とおちあつて暗門のもろ滝となり」との記述からも分かるように、2つの沢が合流して暗門の滝をつくり出す。その左股がふがけ沢だ。当時は左岸の台地に杣小屋があった。

その杣小屋に入って夕飯をとっているとき、山仕事を済ませて降りて来た木こりに「誰か」と聞かれて事情を説明する次のような記述

が『雪のもろ滝』に見られる。

《案内人はしかじかと事情を話し、麓の村長のことばを伝えて、今夜の宿をと頼むと、「よろしい、お泊りなさい」と承知してくれた。》

ここに出てくる「麓の村長」とは、真澄が暗門の滝へ来る途中の川原平集落で宿をとった家の主人・米沢長兵衛だ。庄屋だった長兵衛宅に宿をとり、冬の暗門の滝を探访した奇態な旅人の話は、その後、閉ざされた山懐の集落で途絶えることなく口伝として残った。

その旅人の話を私に伝えたのが、前述した白神山地の最後の伝承マタギ・鈴木忠勝だ。名前や身分、出生地については知らなかったが、「上方から来た不思議な旅人が、冬の暗門の滝を訪れた」という謎めいた話として伝わっていた。「殿様時代のことだった。川原平の長兵衛の爺ッチャの家サ泊まったそうだ」。

真澄は翌々年の寛政10年、今度は夏に、再び暗門の滝を訪れている(『外浜奇勝(三)』)。

《おかいちこの沢にくだり、諸^{もろ}滝の上方からはるばる見下すと、まことに危なげな風景であった。祠のあるまゑで木々に身をよせて、かろうじて幣をとった。》

真澄が記した「祠」は、滝の落ち口左岸の台地にあった。しかし戦後、暗門川沿いに遊歩道が開設されたことで、第2の滝の下流右岸の台地に遷座した。積雪で押しつぶされたことが原因だという。

改めて言うまでもなく、白神山地に見られるブナの森林資源は世界自然遺産であると同時に、地元住民との歴史的な関わりを考えれば、先祖伝来の文化的遺産でもあるわけだ。真澄が書き残した紀行は、それを知り得る優れた資料であり、記録である。

復活させたい暗門の滝への杣道

暗門の滝へ続く杣道は、真澄が泊まった杣小屋のある「ふがけ沢」からさらに奥地へ延びていて赤石川、追良瀬川を経て白神山地を横断し、日本海岸へと抜けている。私は何度も歩いた。途中にある岩小屋、滝の名前や巻き道なども、伝承マタギの鈴木忠勝から聞いて知

っている。

もとより白神山地のようなヤブ山では、昔から杣人が腰ナタやノコを使つて、年ごとに伸びる枝葉を切り払ったり、ときには道を塞ぐ倒木を切つて片付けたりすることで維持管理がなされてきたのだ。現代の入山者の場合もその点、腰ナタやノコは必携である。

白神山地の遺産地域は、観光遊歩道を除くと入山者が激減している。かつての杣道は足の踏み場もないほど草木が密生し、所々ブナの幹に刻まれた古^{いにしへ}のナタメが見られるだけで、人の気配も消え失せた。せめて、真澄がたどった暗門の滝への杣道だけでも復元させたいものだと、かねてから働き掛けていたのだが、津軽森林管理署長が首頭を取り、地元西目屋村など関係諸機関の協力を得て2018年秋、かろうじて一部分だけだが復元した。名付けて「菅江真澄古道」。

ゆつくり歩いて2時間ほどのコースだ。ここでは真澄が書き残した紀行を参考に、山に生きた昔の杣人の歴史を学びながらブナ林を歩き愉しむことができる。

《柴倉山の麓まぢかくわけゆく^{こぶし}と、むかし探掘したものであるう、かなしき(鉦坑)のあるほとりに拳^{こぶし}のような玉霊斤(石膏)があった。枝折の道に牡桂(カツラ)がかおり(『外浜奇勝(三)』)》

鉦坑跡やカツラの巨木は現存している。それを目にするたびに菅江真澄が200年余りの昔、紀行を書き残してくれたことのありがたさが、自然の息吹とともに身に沁みるのだ。この先は、心ある関係諸機関の理解と協力の賜物として、ぜひとも暗門の滝まで杣道を復元させたいものである。

(紀行作家・青森支部会員)



地元役場の職員をはじめ有志が地面に穴を掘り、道標を立てた

BACKGROUND RESEARCH

ウェストンの著作と写真撮影者

上高地研究者 牛丸 工

日本の山を世界に紹介したウォルター・ウェストンの2冊の著書『日本アルプス―登山と探検』と『極東の遊歩場』には、多くの山の写真が掲載されている。明治から大正時代にかけての写真で、貴重なものばかりであるが、ウェストン自身、これらの写真をどの程度撮影したのであるうか、素朴な疑問を検証してみた。

なお私、牛丸^{うしまるたくみ}工は徳本峠への入り口の集落、旧安曇村島々（現・松本市）で昭和31年に生まれた。祖父は中日新聞上高地支局の脇にあった常さん小屋に住み、同支局の管理をしていた。父も山岳関係の仕事に従事して、内野常次郎の3代目後継者だった。父亡き現在は、私が4代目後継者として遺品を引き継いでいる。

東京の大学を出て社会人になるまで全く山岳関係に興味や関心がなかったが、平成5年に東京よりUターンし、地元に戻って安曇村職員となり、村営徳沢ロッジの責任者として10年間勤務した。

こうして山岳関係に目覚め、数冊の本を出版したが、私の山岳に関する関心は「上高地周辺で一番古い写真は何か」が原点で、ここから枝葉が広がって、古い写真を元にあれこれと調べ上げている。現在、どここの会にも属せず、気ままな立場で調査活動が続けている。

ウェストンが著わした2冊の本

英国人ウォルター・ウェストンは3回の来日で、北アルプスだけでなく日本各地を旅している。その行動は、日本山岳創立百周年記念事業における「ウェストン年譜」に詳しいのでここでは省略する。

ただし、常々気になっていたことであるが、明治時代から大正時代にかけて活躍したウェストンの山行関連の写真は、意外に多く遺されているような気がする。しかも、その当時は持ち運びが容易でないガラス乾板の写真機での撮影であるが、山の奥まで撮影されていたことを考えると、よくもまあ大変な苦労までして撮影したもの

だ、と驚くばかりである。

ウェストン自身が写っている写真や、ウェストンが撮影した写真を眺めていて、単純な疑問が浮かんできた。果たして、2冊の著書に掲載されている写真の中で、ウェストン自身が撮影した写真はどれで、また、ウェストンは写真機を所有していたのであろうか。

そこで、3回の来日中で北アルプス周辺におけるウェストンの写真事情について、2冊の著書を中心に考察してみることにする。

『日本アルプス―登山と探検』では合計27枚の写真が使用されていて、撮影者はハミルトン12枚、保里写真館4枚、ベルチャー3枚、市田1枚、ウェストン本人1枚、玉村1枚、撮影者未記入5枚。『極東の遊歩場』では20枚の写真が載せられている。O・M・プー4枚、星野2枚、高野2枚、ウェストン夫人1枚、近藤1枚、撮影者表記がなく、ウェストン本人撮影と思われるもの10枚。

2冊に共通して言えることは、著書における写真の扱いで、撮影者が特定されている写真には、明確に「O・M・P.」と撮影者の名前の記載がある。しかし『日本アル

プスの登山―探検』と『極東の遊歩場』では、撮影者の記載のない写真の扱いは異なっている。

『日本アルプス―登山と探検』

最初の著書『日本アルプス―登山と探検』では、ハミルトンの写真が12枚掲載されている。H・ハミルトンはカナダ人宣教師で、のちに中部地区(岐阜)の主管を務めた人物で、カメラ機材を所有していた。明治27(1894)年、ウェストンはハミルトンと通訳・浦口文治とともに糸魚川より大町を経て松本に到着した。この間、何枚か撮影した。松本から飛騨の笠ヶ岳登山を目指し、松本から旧野麦街道沿いに進み、安房峠を越えて平湯、中尾と通り、25年からの3度目の悲願でようやく笠ヶ岳に登頂して松本に戻り、御嶽山も登っている。なお、本人は死ぬまで笠ヶ岳と思っていたようであるが、岐阜県山岳連盟・木下喜代男会長の調査と研究によれば、笠ヶ岳ではなく抜戸岳であった(本会報「山」2016年3月号に詳述)。

『日本アルプス―登山と探検』の主だった内容は、糸魚川から御嶽山までの山行が書かれている。ウ



Snow Couloir on N.E. face of Yarigatake.



Mrs W. Weston, Phot.]

Bôzu-goya on Yarigatake.

ウエストン
最初の著書
に誇らしげ
にそのとき
の写真を掲
載するのが
人の心理で
ある。それ
をしなかつ
たというこ
とは、槍ヶ

エストーンは2年前の明治25年に槍ヶ岳へ登頂しているが、そのときの写真や槍ヶ岳の写真を持ち合わせていなかった。今回は笠ヶ岳登山だけが目的だったが、本の出版のことを考えて、どうしても槍ヶ岳の写真を掲載したかったためか、松本を出発し笠ヶ岳に向かう前に、ウエストンは槍ヶ岳の写真撮影を松本の保里写真館に依頼していた。保里写真館の撮影技手・安藤鶴一郎は、明治27年8月4日から数日間をかけて槍ヶ岳など4枚の写真を撮影して、それが掲載されることになる。

の槍ヶ岳初登頂の写真」として誇らしげに解説していたが、その写真はウエストン撮影ではなく、O・M・プールであることを私が別稿で解説しているので、そちらをご覧ください。

ウエストンは、槍ヶ岳に初登頂した明治25年8月12日に下山して、赤沢の岩小屋で写真機を枕にして夜を過ごしていることが『日本アルプス―登山と探検』に書かれている。にもかかわらず、このときの山行写真が1枚もないことから考えられるのは、写真機が壊れていたか、ウエストンが写真機を扱えなかったことになる。憧れの槍ヶ岳に初登頂して、しかも写真機を持っていたら、絶対に山頂で撮影して、

岳初登頂の写真は1枚もない証拠である。

ウエストンが撮影したのは唯一、富士山の写真だけである。

『極東の遊歩場』

左上の写真2枚は、ウエストン2冊目の著書『極東の遊歩場』からであるが、上はウエストン本人撮影、下は“Mrs. W. Weston, phot.”、ウエストン夫人撮影である。上の写真は“○○, phot.”と書かれていないので、ウエストン撮影とは言えない、と反撃を食らうところではあるが、ウエストン撮影以外に考えられないのである。

この山行は大正2(1913)年8月の槍ヶ岳登山の際の撮影で、8月7日朝、上高地温泉場を出発



Snow Crevasse on Shirouma.

した一行(ウエストン、ウエストン夫人、上條嘉門次、根本清蔵)は、河童橋の上で東京一高の生徒・大木操によって歴史的な写真を撮影された。その後一行は槍沢の赤沢の岩小屋で1泊した。8月8日朝、赤沢の岩小屋を出発し、坊主の岩小屋を経て、東稜から槍ヶ岳に登頂し、下山して坊主の岩小屋を通って赤沢の岩小屋に戻り、その晩はそこで宿泊しているので、撮影日は2枚とも8月8日となる。同行者は4人しかいないので、写っていない者が撮影者であると断言できるのである。下の写真が坊主の岩小屋で、上の写真が槍ヶ岳東稜の雪渓での写真である。このように撮影者の記載がない10枚の写真のうち明らかにウエストン撮影

は3枚あるし、写真機を携えていたことになる。

8月31日に上高地温泉宿を出発したウエストン一行は、徳本峠を越え、人力車

で松本を経由

して、その日のうちに明科駅前旅館、明科館まで足を延ばしている。

翌日には白馬岳に向かっているの
で、撮影者の名前がない大町と白
馬大雪溪の写真(前頁)は、ウェス
トン撮影の可能性があり、大雪溪
の写真は「ウェストン撮影」と紹介
している文献もある。

しかし、今でもそれなりに権威
のある雑誌『National Geographic』
の写真的扱いは厳密で、撮影
者表示は“Photograph by ○○”
で、写真提供または持ち込み写真
については“Photograph from ○
○”のよう“by”や“from”を使
い分けている。そして、『National
Geographic』July to December,
1921 Volume XL号に白馬大雪溪
の写真も掲載されていて、写真の
説明書きでは“Photograph from
Walter Weston”となっている。ウ
ェストン撮影ではなく、ウェスト
ンが持ち込んだ写真なのである。
詳しく調べると、高野鷹蔵『高
山深谷第2輯』に「白馬尻のクレ
バス」として同じ写真が掲載され
ている。すなわち、白馬大雪溪の
写真はウェストン本人の撮影では
なく、高野鷹蔵撮影であると裏付
けられるのである。

撮影者の表記方法

以上から言えることは、『日本
アルプス―登山と探検』で撮影者
の説明書きがない写真はウェスト
ン撮影ではなく、『極東の遊歩場』
では撮影者の記入がない写真の撮
影者は、ウェストン撮影とそうで
ない写真がある、ということであ
る。

また、もう一つのことも言うこ
とができる。ウェストン自身、本
人の写真機を所有してはなく、大
正2年の山行時の写真は誰から
借りた写真機を使用して撮影した。
もし大正2年のときの写真機が本
人のものであるなら、翌年は日本
アルプス最後のときであるから、
「記念写真」を必ず撮影するはず
である。しかし、大正3年の最後
の上高地は写真がないので、写真
機を持ち得なかったウェストンは、
借りることもなかったのである。

ウェストンは大正4年に帰国し、
昭和15(1940)年3月27日に没
した。3回の来日で日本各地の写
真をガラス乾板で収集し、帰国の
際に英国に持ち帰った。その数は
1250枚で、約1220枚が山岳
関係のようであった。

各地で開いた講演と幻燈会

実はウェストンは出版だけでな
く、各地で講演を行なっている。そ
の際、日本で集めたガラス乾板を
用いて幻燈会をしたのである。

1991年11月、ウェストンが
収集した1250枚のガラス乾板
を、トリノ山岳博物館がロンドン
の骨董市で見つけて購入し、貴重
な収蔵品となっている。ウェスト
ン夫妻には子どもがなく、夫妻の
死後、管理していた者はその価値
を知らずに、売り出したのであ
ろう。そのガラス乾板を見ると、
着色したものが相当数あることが
分かる。ガラス乾板は白黒写真で
カラーはあり得ないが、着色して
カラーにすることの意義は何かと
言えば、ガラス乾板からの印刷で
はなく、幻燈に用いるために着
色したのである。

日本でも昭和初期まで、各地で
幻燈会が行なわれていた。志村烏
嶺や河野齡蔵は教師として山岳写
真や高山植物を撮影し、授業の一
環で生徒に幻燈を見せて講義した。
富山の日本画家・石崎光瑤はイン
ド旅行の際、ガラス乾板により多
くの写真を撮影して、職人に依頼

して細密画のように着色し、幻燈
会を開いている。白黒よりカラー
の方が訴求力があるので、細かい
作業の手を加えて、ガラス乾板の
小さなキャンバスに絵具を塗って
いたのである。

一方、ウェストンの所有してい
た着色ガラス乾板は、西欧人の大
雑把な仕事ぶりが如実に表われて
いて、結構いい加減な出来栄の
ような気がする。松本市内の馬車
の停留所であろうか、馬の尻と馬
車の漕ぎ手の部分が混ざり合っ
て、馬の脚が馬車を跨いでいるよう
な錯覚に陥る。また、全体的に色
が濃く、原色で描かれている。

(山岳データ・アナリスト)



INTERVIEW

平出・中島コンビ再びピオレドール受賞

本会会員で、石井スポーツ所属の平出和也氏と中島健郎氏が、2020年ピオレドールを受賞した。昨年7月に、カラコルムのラカポシ(7788m)を新ルートである南壁から登頂したことに對して贈られたもの。2人は2018年もシスパール(7611m)北東壁初登攀で受賞しており、平出氏は3回目、中島氏は2回目の受賞。ピオレドールは、その年の優れた登攀を称えることを目的とし、登山における冒険の要素と勇氣や探究心を高く評価する賞。

—今回なぜラカポシへ？

平出…2003年のキンヤン・キッシュの登山隊に参加した際、初めてラカポシを見た。横から見ると鋭く尖った三角形の、それこそK2のように見えた。その後、ドイツやゴールデン・ピーク、シスパールなど、いろいろな角度から(ラカポシを見てきた。あらゆる角度から見ていたので、自然に僕の目線はラカポシに向かったのだと思う。

ただ、僕たちの目標はK2の未踏ルート。偵察に行った2018年の夏に2人でK2を目にしたとき、まだ経験が足りないからトレニングをしようということになった。7000m後半くらいの山を確実に登れる登山家になろうと。その一つとして、ティリチ・ミールの申請をしていたが、登山許可が下りなかった。そこで、自分たちの登山人生も限りがある、チャンスがあるのに何もしないで帰ってくるのはもったいない、ということでもラカポシに切り替えた。

—今回の受賞はどのような点が評価されたと思いますか？

中島…今回の受賞理由は、ルートを見付けたことに尽きるところ。平出さんは圧倒的にルートを見付ける能力に優れている。

平出…僕たちは評価されるために登っているわけではないが、嬉しかったのは、僕たちがやりたいと思っていることが評価されたこと。正直、課題を与えれば、僕たちよりも高い能力を発揮できる人

はいる。一方で、僕は登山で重要なのは目標を見付ける力であり、それも登山技術の一つだと思っている。自分で目標を見付けられなければ、力を活かすことはできない。今でも未踏の魅力的な山や壁はまだまだあるし、僕はそれを見付ける能力がほかの登山者より少し長けているのでは、と思っている。だから、自分たちの登山に対するアプローチと、賞の方向性がマッチしていたのだと思う。

中島…特にあの壁は奥深くにあって、人目に付かない。気にしてみたら見えるかな、くらいの壁。思い入れがあつた平出さんだからこそ見付けられた。

平出…シスパールの航空写真に今回のラカポシの南壁が写っていて、調べ始めた。今までに偵察に入つた登山隊もいるらしいが、実際に登山をした隊はなかった。一見セラックがいっぱいあるので、危険に見えたのかもしれない。ただ、ベースキャンプから山をずっと見ていると、やはり安全なラインをその中に見出すことができた。

中島…極地法だと雪崩で流されるから、それでは登山にならないと考えられていたのではないかな。

南面は不可能というのが定着していたんだと思う。

平出…僕たちのアルパイン・スタイルがマッチした壁だったと言える。スピードを出して、危険地帯にいる時間を最短にすることが出来るから。

—最後に、今後の登山について。平出…今回のコロナ騒ぎで、今改めて思うことは、行けるときにいった方がいいということ。K2には間違いなく行きたい。今までは、K2の前に2つくらいトレニングしようと思いついたが、(十分準備できなくても)行ける所まで行こう、というのも一つの考え方かもしれない。

シスパールは思い入れを持って、15年かけてやっと登れた山。だからこそ、得るものが大きかったし、僕の人生に大きく関わってくれて、僕を育ててくれた。K2に1回、2回で登れてしまったら、シスパールのようにはならないだろう。何年かかってもいいから、逆に年数をかけてでも登りたい。贅沢かもしれないけれど……。

8月16日、長野県富士見町にて。
(インタビュアー) 国際委員会委員長・和田 薫

LIBRARY

JACC本部の図書室は宝の山

羽根田 治

図書館からインターネットへ

フリーランスのライターにとつて、執筆テーマに関する資料集めは必要不可欠な作業のひとつである。

まだインターネットがなかった時代、資料を収集するための唯一最大の手段は図書館だった。最寄りの公共図書館はもちろん、国内で刊行されたすべての出版物が収集・保存されている「国会図書館」、東京の世田谷にある雑誌専門の図書館「大宅壮一文庫」、日本交通公社が運営する観光・旅行の専門図書館「旅の図書館」などは、よく利用したものだった。

そして、これらの図書館以上にヘビーユーザーだったのが、山と溪谷社の資料室だ。かつて同社は増上寺に近い東京港区の芝大門にあり、その自社ビルの地下1階が撮影用のスタジオと資料室になっていた。資料室には、同社で刊行された本や雑誌のほか、ほかの出版社の山や自然、旅関係の本と雑

誌、社員が資料として購入した本、日本全国の5万分の1と2万5000分の1地形図などがそろっていた。また、社会人山岳会の活動が活発だった時代、『山と溪谷』誌には会報を紹介するページがあり、全国の山岳会から会報や事故報告書などが送られてきていた。それらも資料室にきちんと保存されており、原稿を執筆する際の貴重な資料となった。

その後、同社は何度か社屋の移転を繰り返し、それに伴い資料室もなくなり、蔵書は倉庫に保存されてしまったようだ。貴重な資料も少なくなかっただけに、残念でならない。

山と溪谷社の資料室がなくなった後は、前述した図書館に加え、インターネットが資料探しの主な手段となった。パソコンを操作するだけで、自宅にいながら必要な資料を収集できるというのは、実に画期的なことだった。

ただ、よく指摘されるように、インターネットで公開されている情

報には主観が混じったものも多く、100%の信頼を置くことはできなかった。原典から引く張つてきた記述にしても、正確に転載されていないものもあり、必ず原典に当たってみる必要があった。

インターネット時代になってからは、そうしたことに注意しながら執筆活動が続けてきたが、過去の大きな遭難事故を検証しようとしたときに、とうとう行き詰まってきた。これまで利用してきた図書館にもネット上にも、執筆の参考となる資料がほとんどなかったからである。

近年に起きた遭難事故であれば、当事者や関係者らに直接取材することが可能だが、大正期から昭和中期にかけて起きた事故については、当事者らはほとんど他界しており、インタビュによる取材ができない。比較的容易に入手できる資料といえば、事故を報道した新聞や山岳雑誌の記事ぐらいしかなかった。

JACCならではの所蔵内容

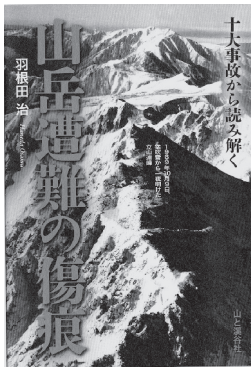
今年の2月に刊行された拙著『山岳遭難の傷痕』（山と溪谷社）の執筆に取り掛かったときに、ま



貴重な山岳書がぎっしりと並ぶJACC本部図書室の書架

ず直面したのがその壁だった。個々の事故についてインターネットで調べてみると、新聞や山岳雑誌の記事以外の資料として、事故によつては登山史研究家の安川茂雄氏らが経緯などを記した書籍もあったので、インターネットを通して購入できるものは入手した。しかし、ほとんどが絶版になっていて、入手できたのはほんのわずかだった。後は国会図書館で探すしかなかったが、どの本にどの事故のことが記されているかは、実際に本を手にとってみなければ分からない。閲覧手続きの手間暇を考えると二の足が踏まれた。

だが、そうした書籍よりも、と



2月発刊の『山岳遭難の傷痕』

にかく手に入れたかったのが事故報告書の類であった。昔は山岳会や山岳部による登山が主流であり、遭難事故が起きると、当事者が所属する山岳会(部)や山仲間が、事故の原因を究明して教訓とするために必ず詳細な事故報告書をまとめていた。安川茂雄氏らの著書の中にも事故報告書を基に書かれている文章が多く見受けられ、事故報告書なくしては、私が検証しようとしていた事故についても執筆することはとうてい不可能と思われた。

しかし、それらを手に入るには閲覧する手立てがなかった。国会図書館といえども、さすがに遭難事故報告書までは収めていない。かつての山と溪谷社の資料室にはあったはずだが、公開していない。今となつてはどうしようもない。

新聞や山岳雑誌の資料だけでは、とても事故の検証はできない。そ

う諦めかけていたときに、人づてに日本山岳会(JAC)の本部に図書室があることを教えられた。聞けば、そこには国内外の山岳関係の書籍が充実しており、事故報告書の類も所蔵されているという。私が3年前にJACに入会したのは、まさにこの図書室を利用したのがためであつた。

市ヶ谷のJAC本部内にある図書室を初めて訪れたときの印象は、思ったよりもこぢんまりとしているな、というものだった。しかし、目当ての資料を探そうとして遭難関係の書棚をチェックすると、見覚えのある本に混じつて「こんな本が刊行されていたのか」と思うような古い本が並んでいて、いささかびつくりした。興味を覚えて何冊か手に取つてみると、調べようとしていた事故について書かれている一文が見付かることもあり、目当ての資料のことも忘れて、ページをめくる手が止まらなくなっていた。

また、『山と溪谷』『岳人』をはじめとする、国内で刊行された山岳雑誌が創刊号からそろっているのも、事故に関する記事を自分で細かくチェックできるのでありがた

かった。JACの機関誌『山岳』はもちろんのこと、昔の慶應大学山岳部の年報『登高行』や早稲田大学の『リュックサック』などもすぐに手に取つて見るのができたので、非常に助かった。

図書室から生まれた私の本

こぢんまりとしているように見えるが、図書室の蔵書が膨大なものであることは、何度か利用しているうちに実感できた(蔵書の数、なんと約1万3000冊にのぼるといふ)。その中から目当ての資料を探すには、JACのホームページからアクセスできる蔵書検索サービスが役に立った。キーワードを入力すれば、資料の有無がすぐに分かり、しかも、探している資料のほとんどが収められている。

あるとき、探している事故報告書をこのサービスで検索し、所蔵されていることが分かったので、図書室に行つて閲覧しようとしたのだが、どこかに紛れ込んでいたのかどうしても見付けられなかったことがあった。そこで本部事務局のスタッフの方に確認してもらったら、すぐに探し出して、次回

来るときまでに用意してくれていた。所蔵されている資料に通じているスタッフがいるというのも心強かった。

かくして今年の2月、無事『山岳遭難の傷痕』を刊行することができた。その「あとがき」にも書いたが、もしJACの図書室がなかったら、この本は世に出ていなかっただろう。

聞くところによれば、図書室を利用する会員はそれほど多くはないのだそうだ。なんともつたいない、と思わずにはいられない。JACの図書室は、国内外の山岳関係の本をほぼ網羅している唯一の存在であり、ほかではまず見ることができない貴重な本がたくさん眠っている。私にとっては、それはまさに「宝の山」に映る。

コロナ禍の影響でしばらく足は遠のいているが、騒動が落ち着いたらふらりと図書室をのぞいてみたい。豊かな蔵書の森の中で、気の向くまま本を手につけてゆったり過ごす時間の、なんと贅沢なことか。実際に山に登るのはまた別の楽しみが、JACの図書室には満ち溢れている。

(フリーランス山岳ライター)

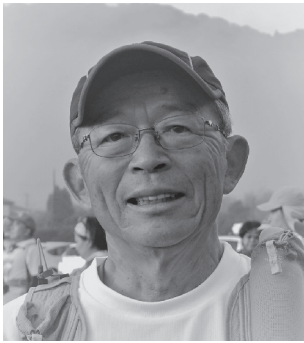
COMMITTEE REPORT

全国山の日協議会との連携深め
運動のすそ野を広げよう

《山に親しむ機会を得て山の恩恵に感謝する》―国民の祝日「山の日」制定の趣旨である。この「山の日」制定の趣旨に沿って日本山岳会がどう動くのか。何を考え、年間を通じてどう運動を進めるのか。「山の日」事業委員会に委ねられた課題である。

JACの中でつながりはもちろん第一だが、ほかの団体や地域との連携、交流を通じて、「山の日」運動の幅を広げ、裾野を大きくしたい。常日頃思っていることがある。

8月14日、JACのルームで開いた一般財団法人・全国山の日協議会との話し合いは、「それにし



全国山の日協議会の新理事長に就任した梶正彦会員

「山の日」事業委員会

ては足元が定まっていけないのかな」という私たちの反省がベースにあった。全国山の日協議会は磯野剛太理事長の急逝を受けて6月、新体制が固まり、これまでと違った運動第2ステージの活動をスタートさせようとしていた。コロナ禍のまっただ中、今年度初めて委員会開催で、9人が出席し、6人がオンライン参加した。古野淳会長はオンラインによる特別参加である。

全国山の日協議会からの出席者は新理事長の梶正彦さん、三木健一理事、副会長の小林政志さん（前JAC会長）、理事の渡邊雄二さん、佐野忠則さん、手塚友恵事務局長の6人（小林、渡邊、佐野の3氏はオンライン参加）。三木さんを除けば皆さんJACの会員である。当事業委員会の理解と協力を得たいということで、事務局長、理事長から説明があった。

話し合いの内容を議事録より紹介する。

*「山の日」は「登山の日」のイメージがまだ強く、今後は本来の「山の日」の趣旨に沿った活動を展開する。

*若い世代が「山の日」活動に参加できるような企画を考える。

*国民運動になり得る活動の展開、見える化、話題性も。認知度を高める。

*国民運動を担う組織、全国をカバーするネットワークの構築。

↓JACへの期待。

*全国民に向けた有効な情報発信、効率的な展開に向けてのデジタル化。全国山の日協議会のホームページの再構築、アピール度強化。

*地域に即した具体的で、取り組みやすい企画の立案と実行。

*全国「山の日」記念行事の継続（自治体、実行委員会まかせでなく、積極的参加を）

*全都道府県での「山の日」行事の定着、恒例化。

*全国山の日協議会の活動資金の確保、増大（公益財団法人へ移行の要）

*国会、行政への働き掛けを強め、「山の日」の理念に沿った活動をしやすい環境の整備、などなど。

運動のすそ野を広げる第2ステージだという認識に立って各都道府県、地域での草の根運動としてどう定着させるか、どうネットワークしていくか、夢があり面白そうでチャレンジングな展開も重要である。

本会創立120周年記念事業企画「全国山岳古道調査」および「日本山岳会と全国山の日協議会とのコラボレーション案」についての説明があった。

*本会創立120周年記念事業として全国の山岳古道を調査し、公開する。全国33支部はじめて多くの会員たちが調査に参加、地元の古道研究者らの協力を得ながら情報を集約し、2025年の発表を目指す。

*調査活動に関して、中央行政機関や地方公共団体、企業などからバックアップを受けるための橋渡しを、全国山の日協議会に行なってもらおう。活動は地域の観光振興や文化活動、環境保護、高齢者の健康増進などへの社会的貢献が期待でき、両会の知名度およびイメージアップにつながることをだろう。

（成川隆顕）

さんけん通信

コロナ禍と群発地震、熊騒動の夏

山田和人

7月15日にやっとオープン

山研は、新型コロナウイルスの感染拡大防止と上高地を中心とする群発地震のため、今年の宿泊受け入れ開始を7月15日としました。各自シラフ持参をお願いするなど、これまでとは違ったご不便をお掛けするなかでの山研運営となつていますが、利用者の皆さんのご協力をいただき、夏シーズンを迎えることができます。

7月7日から大雨災害による国道158号の通行止めで上高地は一時閉じ込められていましたが、

幸い15日に解除、梅雨明け以降は天気も良く、下界の暑さはテレビのニュースで知る程度でした。お陰で毎日、穂高の稜線を眺めながら、管理人として日々のリズムもできてきました。

群発地震は8月に入って収まりつつありますが、まだときおり地鳴りが起こっています。1998年夏の群発地震は3ヶ月も続きましたが、今回はこのまま終息してくれることを願っています。ただし、群発地震が完全に収まったわけではないので、今年は北ア南部の岩場には近付かない方がいいように思います。



6月上旬の岳沢湿原と六百山

例年より多いクマ目撃情報
今年是全国的にクマの出没がニュースになっているですが、上高地

でも目撃情報が例年に比べて多いようです。ホテルや旅館ではグリストラップ(大型ゴミ箱)が壊されたり、キャンプ場ではテント内の食料が漁られる被害も出ています。いずれも夜間の出来事で、国立公園を管轄する環境省は、夜間の出歩きを控えるように注意喚起を出しています。

昼間も散策路や登山道でクマが目撃されることがあり、8月上旬には山研のバルコニー下に可愛らしい子熊が現われましたが、5分ほどで笹藪の中に消えていきました。この子熊は、西糸屋山荘さんにもときどき現われるようです。また、山研に宿泊した方が焼岳への登山道で至近距離で遭遇していますが、追ってきたりすることはなく、無事に山研に戻ってこられました。

上高地にいる昼間のクマは、大きな声や音で驚かせたりしなければヒトに向かってくるようなことはない、と言われています。これは動物との距離を保つことで、ヒトと動物が共生することを目指している国立公園・上高地の姿なのかもしれません。

新型コロナウイルスの感染が収



深緑の森に包まれた8月下旬の山研

まらないなかで迎えた夏シーズンですが、上高地を訪れる人々の表情はマスクを通して明るく、この美しい光景が訪れる人々にひとときの安らぎと解放感を与えていることを感じます。豪雨や群発地震の影響で河童橋から見る風景は昨年と少し違うところもありますが、晴れた日には梓川の青い水が目にも染み入ります。

上高地はこれから下界よりひと足早く秋シーズンに向かいます。この原稿を書いている8月下旬、サラシナショウマが咲き始めました。会員の皆様のお越しをお待ちしております。

(上高地山岳研究所管理人)

会員名簿を発行します

総務担当常務理事 永田弘太郎

当会の会員名簿は、個人情報保護のため、また経費などの問題もあり、平成20(2008)年を最後に発行していませんでした(平成23(2011)年に入会者のみ補遺版を作成)。

しかし、発行を希望する会員も多く、総会などを通じて要望が挙がっていました。

平成27(2015)年に個人情報保護法が改正されたのを受けて、当会の「個人情報保護規程」を改訂し、本年4月1日に施行されました。それによつて今般、会員相互の親睦や安否確認などの観点から会員名簿を発行することにいたしました。

ただし、個人情報印刷物にすることはリスクが伴うため、会員の皆さま個々に掲載・不掲載を伺い、望まない会員の情報は掲載しない形での発行になります。したがって、全会員の名簿ではありません。

また、作成した会員名簿は名簿掲載者のうち希望者のみに有料で頒布し、発行部数を限定します。

当会の個人情報保護規程第10条に定めているように、会員名簿を第三者へ提供することはいたしません。

新たな会員名簿は以下の要領で、作成・発行いたします。

①会員名簿への掲載・不掲載は個人の意志によるものとする。

②会員名簿は掲載した会員にのみ頒布する。

③有料とする(1部1000円程度)。

④流失を防ぐため、ナンバーリングを施す。

⑤希望者が500人以下の場合は作成しない。

⑥掲載する項目は、会員番号、氏名、住所(会報「山」の発送住所)、所属支部、会員種別とする。

⑦令和3(2021)年の発行を予定。

掲載および会員名簿の購入をご希望の方は、同封のハガキでお申し込みください。申込みの締切は、10月30日までとします。

掲載を希望されない方は、ハガキの返送は不要です。

「入会申込書」が新しくなります

総務担当常務理事 永田弘太郎

当会の「個人情報保護規程」を改訂し、本年4月1日より施行しています。それに伴い「入会申込書」を改正いたします。

入会の際に個人情報の利用について承諾を得ることが必要になり、また、記載すべき事項や内容、スペースなどについて改良すべき点があったため改めました。

今後入会の際には、申込者に当会の「個人情報の取り扱い」を確

認していただき、利用について承諾を得ることになります。正会員、準会員、団体会員すべて同様です。本年(令和2年)10月1日から実行していきますので、皆さまご協力のほど、よろしくお願いいたします。

なお、新しい「入会申込書」と「個人情報の取り扱い」は、ホームページからダウンロードすることができます。

入会申込書は当会ホームページよりダウンロードできます。
https://jac1.or.jp/admission/application_form

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとリポート
します。

越後支部
第63回高頭祭を縮小開催

7月25日に「第63回高頭祭」を一部有志により、弥彦山大平園地に座する高頭仁兵衛翁寿像碑前で縮小開催した。越後支部では、新型コロナウイルスの感染拡大による全国的な自粛要請に伴い、4月初旬に4～8月までの複数人集会による支部行事を中止・延期としていた。例年同時開催している「弥彦山たいまつ登山祭」も、大人数でのたいまつ市中行進となるため、弥彦神社や観光協会からの要請もあり中止となった。しかし、一部の支部会員から、高頭祭は支部伝統行事でもあり、小人数での継続的な開催を望む声が強く、感染防止対策を厳守して実施することになった。

高頭祭は、越後長岡出身の日本山岳会創立メンバーで第2代会長

を務めた高頭仁兵衛翁の功績と遺徳を偲ぶ行事。開催連絡を役員と一部関係者のみとさせていただき、午後2時に現地集合した参加者は24名だった。各人が山頂駐車場まで車で来たり、麓からロープウェイを利用したり、汗をかきながら登山道を登って来たりと、様々なルートで集合し、久しぶりに再会した顔を見て懐かしさを感じた。

午後2時30分の開式宣言で始まり、最初に桐生支部長から次のような挨拶があった。今年は緊急事態であったが、一部会員の協力で高頭祭を継続実施することができたと感謝を述べられた。4月以降の行事の中止・延期は、ホームページや支部報などで状況報告したが、直接コミュニケーションする重要性を感じた。例年、高頭祭の神事を執り行なう平田大六支部名誉会員は、都合悪く欠席のため、玉串奉奠などの儀式を献花・献酒に



開式宣言後の桐生支部長の挨拶

変更する。

神事は、高頭寿像碑の建立・移設・修復の除幕式を継承したもので、今後新しい高頭祭スタイルにするかいろいろ意見を聞いてみたい。山行や懇親会など支部行事を中止したが、この機会に支部活動の資料まとめなど、ソフト的事業を行ないたい。現在、遠藤顧問に、今までの高頭祭の歴史について編集整理をお願いしており、12月ごろの発行目標で支部会員と関係者に配布予定である。高頭祭の歌を作り来年には披露したいと思っているが、案として昭和39年「新潟国体の歌」の曲で歌詞を公募したい。などの話があった。

献花は、支部長に引き続き、佐藤県山協副会長、治田吉田山岳会代表、小林弥彦山岳会会長、楡井峡彩山岳会代表、山崎支部名誉会員、玉木新潟県警警備隊長など、支部会員でもある各団体を代表してお願ひした。お酒を好まれた高頭翁のレリーフへの女性会員による献酒の儀式は、越後支部らしいユニークなものである。

その後、寿像碑前で記念撮影を行ない、今年の記念講演は中止としたため、寿像碑前の芝生で会員同士の「3密」を避けた懇談会を設けた。桐生支部長から「新潟国体の歌」の歌詞が配られて高頭祭の歌の募集説明、遠藤顧問から高頭祭の歴史をまとめる編集方針の説明、小山副支部長から支部行事中止の中で、11月1日の八十里越え・番屋山(939m)のみ新規に実施すると報告があった。

本来なら今年度高頭祭に古野会長や小林前会長の参加もお願いしており、野澤副会長のご尽力で本部YOUTH CLUB会員20名ほどが参加していただき、昨年から活動開始した越後YOUTHとの交流会を行う予定であったが残念な結果となった。

寄附金および助成金などの受入報告

(令和2年8月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、そのほか
高尾登山鉄道株式会社	150	高尾の森づくりの会活動への指定寄附金
株式会社三井住友信託銀行	200	高尾の森づくりの会活動への指定寄附金
グローリーエンジニアリング株式会社	50	高尾の森づくりの会活動への指定寄附金
アサヒビール株式会社	100	高尾の森づくりの会活動への指定寄附金
伊藤ハム株式会社	50	高尾の森づくりの会活動への指定寄附金
コニカミノルタ株式会社	200	高尾の森づくりの会活動への指定寄附金
電源開発株式会社	100	高尾の森づくりの会への指定寄附金
富士電機株式会社	50	高尾の森づくりの会活動への指定寄附金
エリオニクス株式会社	100	高尾の森づくりの会活動への指定寄附金
一柳 幸子 様	100	東海支部運営費用
公益財団法人マエタテクノロジーリサーチファンド	500	山形支部「学校から見える山」事業助成
一般財団法人山の道	200	日本山岳会運営費用
松野 賢珠 会員	15	永年会員からのご寄附
柴田 隆平 様※	1,000	東海支部運営費用

※8月号の記載に誤りがありましたので再掲の上、お詫びいたします。

例年は高頭祭で梅雨明け宣言するイメージであったが、今年は異常気象で梅雨明けしておらず、幸



高頭翁寿像碑前での記念撮影

運にも閉式となった午後3時30分ごろに小雨が降り出してきた。来
年の高頭祭は、梅雨明け後の炎天
青空の下で多くの方々に参加して
いただき、盛大に開催できること
を願う。

(小泉良夫)

東九州支部 コロナ禍の下、創立60周年記念行事を模索

当支部は1960(昭和35)年8月5日、大分支部として発足して以来、本年で60年目を迎えている。発足5年後の1965年には宮崎

県の会員も加入して東九州支部と改名し、その後1985年には宮崎支部が分離独立したが、名称は変更せずに今日に至っている。
支部では創立60周年を記念して、
①記念行事(記念式典・記念講演会・記念祝賀会) ②記念山行(式典記念山行、国内山行、海外山行) ③60周年記念誌発行 ④登山ガイドブック『大分百山』3訂版の発行など、一連の事業を計画して昨年度から準備を進めてきたところである。しかし、今春からの新型コロナウイルスの感染拡大により、記念行事や記念山行の実施に赤信号が灯いた。

記念行事は当初10月24日(土)を予定して、会場の予約や記念講演講師の依頼などの準備をしていたが、定期総会(4月に開催予定であったが、1ヶ月繰り下げた上、書面議決で実施を前にして、予定どおりの実施は危ういと判断した。そして、事態の収束を期待して11月21日(土)に実施を繰り下げて、新規に会場の予約や講師への日程変更通知をはじめ、新たな準備をしてきたところである。

しかし、昨今の新型コロナウイルスの感染状況を見ればその実施も危うい状況にあるため、8月末に至り、当初企画どおり(予定どおり)の記念行事(記念式典・記念講演会・記念祝賀会)の実施は断念し、発送準備まで終えていた各支部などへの招待状も直前に発送を中止するに至ったのである。

会報「山」の目録が完成

会報「山」851号から900号までの目録がようやく完成しました。大変遅くなりましたが、PDFデータを9月末にはHPにアップします。で、印刷は各自で行なってください。なお、従来どおり印刷版も準備します。ご希望の方は郵便切手200円分を添え、事務局までお申込みください。製本注文の方は申込み不要です。(会報編集委員会)

演会・記念祝賀会)の実施は断念し、発送準備まで終えていた各支部などへの招待状も直前に発送を中止するに至ったのである。

しかし、これまでも10年ごとに必ず実施してきた周年行事であるため、支部会員(会員78名、準会員6名、会友71名)の全員参加を基本テーマにした、なんらかの記念の行事を実施すべく、現在検討中である。3蜜を避けるため、閉鎖した会場での集会や、飲食を伴う祝賀会やパーティなどは行わずに、支部会員がごぞつて集い、祝う場所とその内容を現在企画検討しているところである。

なお、当初予定の記念国内山行(富士山を予定、記念海外山行(ピサン・ピークを予定)は全面的に中止とせざるを得なくなっているが、式典記念山行は11月22日(日)に由布岳で実施を予定している。

また、60周年記念誌の発行、『大分百山』3訂版の出版は予定どおりに、10月末を目途に現在その編集作業が進んでいるところである。以上、コロナ禍における周年行事の実施に関して苦悩している状況の一端を報告しておきたい。

(飯田勝之)



図書紹介

小泉武栄著

日本の山ができるまで——
五億年の歴史から山の自然を
読む



2020年1月
(株)エアンドエフ
菊判 216ページ
2400円+税

これまでも『日本の山はなぜ美しい』(古今書院)をはじめ、『日本の山と高山植物』(平凡社新書)、『山の自然学』(岩波新書)、『山の不思議発見!』(ヤマケイ新書)など多くの本を上梓している著者であるが、今回の本では「あとがき」にあるように「日本列島の長い地質の生い立ちが、現在の山の自然の姿にどのように関わっているかを、個々の山ごとに紹介して」いる。

これまでは、地域ごとの山や個々の山の特徴や植生についての内容で、景観的な差異からその自然現象の謎解きをしていく、言ってみれば現在の山の姿や自然を俯瞰する視線で観察・解説していた。が、この本ではその視点とは別に、もう一つ、地質学的な時代の時間軸が大きなベクトルとして加わった。つまり、地球の成り立ちという壮大な地質学の知識をベースにして各地の山々、加えてジオパークなどの名勝地が語られている。とはいえ『博物学者』を自称するほどで、地質から地形、植生までかなり広い分野に興味をもって「著者にして」この本の執筆は私個人にとってはかなり辛い仕事」だったと述懐している。つまり、山好き以上に地質学に関心や造詣が深いほど、あるいは3Dの立体感ある地質構造を頭の中に思

い描ける人ほど理解の進む一冊となりそうだ。

第一・二・三章では日本列島の地質の生い立ちに関する専門的な解説が中心で、まずそこで読者は学生時代の授業内容を思い出し、あるいは立往生するかもしれないが、そこでも著者は「岩の名前を覚えることよりも、岩が違ったら、そこで地面の色が違ったり、植物のつき方が違ったりすることに気が付く方が大事だと考えてください」と、ほっとするアドバイスを挟んでくれる。

そして、いよいよ第四章になってくると、立山・剣岳といった名峰の名前が登場し始め、具体的な山の成り立ちが展開してくる。自分の知っている山、登ったことのある山が出てくれば、険悪な岩場や谷の深さ、ときには高山植物の美しさを思い出し、それらの存在のカラクリが謎解きされ、知的好奇心で頁を繰ることになる。が、やはり今回は地質学を軸にした解説なので、広範囲な日本の山々、ジオパーク、名勝地を取り上げたため、箇所によっては解説の物足りなさが否めない。

地殻の動きはまさに縦横無尽で

あり、その摩訶不思議な生成の結果である地形の不思議さは、動植物の生きる知恵の巧妙さとも密接に連動していることも興味深い。

例えば、有名なハヤチネウスユキソウ―蛇紋岩植物の代表的な分布地とされている早池峰山に咲く花として認識しているが、実は蛇紋岩地を避けて生育していること。けれど、南アルプス・仙丈ヶ岳の山頂一角にある蛇紋岩地には、そこだけきれいなお花畑が広がっていること。また、佐渡島の尖閣湾北の平根崎にある無数の大きな罅穴(ポットホール)について―波の侵食でできたという通説を覆す著者の推論と根拠付けの解説には「なるほど!」と膝を打つ。

それに不明・解けない謎もまた多い。伊豆諸島は西と東で溶岩の種類が違っていて、西の列の新島・式根島・神津島は白い色をした流紋岩、しかし、東の列の伊豆大島・三宅島・八丈島などは真っ黒な玄武岩。なぜそうなったかは火山学者でも分からない。神津島の天上山では下の白い部分が火砕流、上の灰色の部分が溶岩。溶岩の下部の黒く見えるのは「不思議なことなのですが、白い流紋岩溶岩の一

部が真っ黒な黒曜石に変化するのです」……そうした分からない現実の事象にも素直に感動する。

著者が勧めるように「まずは好奇心が旺盛で知的レベルも高い山好き」にとつて良書であると同時に、「各地のジオパークの関係者」にとつてもより広い視点で地元の魅力発見に役立つ一冊である。

(中村好至恵)

小池伸介／澤井俊彦共著

ツキノワグマのすべて 森と生きる



2020年4月
文一総合出版
A5判 128頁
1800円＋税

ヒグマ学への招待 自然と文化で考える



2020年3月
北海道大学出版会
A5判 369頁
3600円＋税

増田隆一編著

に侵入してきた、田畑を荒らされたといったクマの悪いニュースが目立つ。いったい、クマとはどんな動物なんだろう。

そんな折、日本に生息するツキノワグマとヒグマに関する著書が続けて出版された。両書に共通することは、「研究者が書いた本である」ということだ。昨今、いろいろな本からのかき集めで作った知識本が多いが、両書はそんな薄っぺらなものではない。研究者が書いた本は、仮に未解明な部分があつても、奥が深いし安心して読みたいと思う山仲間にとつて、格好の機会である。

『ツキノワグマのすべて』は、しかるべき所から出た本といえる。

著者が在籍する大学の研究室は、ツキノワグマの研究では草分け的な存在で、蓄積された豊富な資料と人材がある。本書は、簡潔な文章で必要なことを余すところなく紹介している。歴史ある研究室という背景があるからだろう。世代交代が進んでいるが、1970年代、1980年代のその部屋のクマの研究とは、私も親交があつた。

内容であるが、パート1では外部から見た形態的特徴。巨体でありながら木登りも得意とする骨の仕組み。人間をはるかに超えた嗅覚と聴覚。名前の由来である胸の三日月模様は、野外での個体識別に使えるほど千差万別だということなど、主に身体について紹介している。

パート2では、母グマは冬眠中に出産、体重300gのネズミ大で生まれる赤ちゃんグマが、春先には2〜3kgに成長、子育てはすべて母親がするというようなこと。昼行性だが、秋には夜も活動するようになること。しかし、人が活動している場所では、人との遭遇を避けるために夜行性に変わったりすること。食べ物や、1日、1年、一生の生活史が紹介される。

パート3では、前章で紹介された生態によって山野に残された生活痕(フイールドサイン)、すなわち、足跡、フン、食痕、冬眠穴などが紹介されている。

パート4は、読者に教えたいこと、読者が知っていたがっていることがQ&A形式で書かれている。クマに関する基礎知識、クマは人を襲うのかといったことが、少し長めの文章で綴られている。

本書は、豊富な写真を眺め、短い説明を読むだけで、皆が皆「クマ博士」になれる一冊なのだが、様々な植生や環境で撮られた迫力あるクマを見てみると、「こんな写真が撮れるのか」とカメラマンの忍耐と技量に敬服してしまう。さらに、怖さを忘れて、ぜひクマに会ってみたいと思うようになる、魅力あふれた仕上がりになっている。

『ヒグマ学への招待』は、16名の研究者が、それぞれに異なる分野からヒグマを紹介している。全369ページ、序章を含めると17章から成るボリュームのある本で、いずれの章も、文体を変えれば即、学術論文となるような濃い内容が詰まっている。

著者の一人でもある編者は、全体を「ヒグマ学」と表現。それは、ヒグマという動物を通して、自然環境とヒトの文化や社会を見詰め直すことで、私たちが自然とどのように向き合い、未来の社会をどのようにに築いていくかを改めて考える機会(学問)と定義している。本書の意図も内容も、まさに、この「ヒグマ学」に集約されており、ヒ

グマという一動物の紹介に留まらず、歴史、考古学、民俗学、美術工芸品としてのヒグマにまで言及している。

研究は進むにつれ細分化され、深淵を極めようと進んで行くものだが、研究に専念するあまり、自分の立場が分からなくなる研究者もいるようだ。しかし、どんな小さな特殊な研究であれ、研究という巨大な機械の中にある小さな歯車、少なくとも、その歯車の一つの歯を担っているのであり、すべては人類に貢献しているのである。本書のようなまとめ方は、「研究とは何か」を考える上での一助にもなるだろう。

研究者が己の殻に籠っている限り、研究は一般社会に広まらず、小さな別世界のことで終わってしまう。クマに関する2冊の本のように、専門家たちが、科学を分かりやすく解説する「通訳」の役を担ってくれると、研究に対する世間の理解も深まっていくことだろう。新型コロナウイルスに押され在宅時間が増える中、少し肩の凝る本を読むことも一計かも知れない。

(安間繁樹)

図書受入報告(2020年8月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
増田隆一(編著)	ヒグマ学への招待 : 自然と文化で考える	369p/22cm	北海道大学出版会	2020	出版社寄贈
小池伸介(著)澤井俊彦(写真)	ツキノワグマのすべて : 森と生きる	128p/21cm	文一総合出版	2020	出版社寄贈
広木詔三	森林の系統生態学 : プナ科を中心に	368p/22cm	名古屋大学出版会	2020	出版社寄贈
八嶋寛	太白山 : 日本、韓国、中国の歴史を巡る旅	152p/22cm	東北アウトラ情報センター	2020	著者寄贈
山本高樹	冬の旅 : ザンスカール、最果ての谷へ	288p/19cm	雷鳥社	2020	出版社寄贈
日本ネパール協会(編)	現代ネパールを知るための60章	397p/19cm	明石書店	2020	編者寄贈
高橋秀樹	山とけものとお師の話	136p/19cm	静岡新聞社	2020	出版社寄贈
大町市立大町山岳博物館(編)	博物学と登山 : 渡邊敏没後90年企画展	37p/30cm	大町市立大町山岳博物館	2020	発行者寄贈
佐藤俊夫(編)	DAS EDELWEISS X (関西学院大学山岳部部報)	106p/23cm	関西学院大学山岳部	1940	松家晋氏寄贈
福田宏年	山の文学紀行	273p/18cm	朋文堂	1960	購入

会務報告

■8月の理事会は夏休みのため休会でした

ルーム日誌 7月

4日 常務理事会 アルピニズムクラブ
5日 山行委員会
7日 図書委員会
11日 スケッチクラブ
12日 休山会
14日 「山の日」事業委員会
17日 総務委員会
19日 三水会 つくも会
20日 会報編集委員
21日 改革事業推進委員会 アルピニズムクラブ
25日 緑爽会 平日クラブ
26日 山岳編集委員会 家族登山普及委員会
27日 記念事業委員会
28日 記念事業委員会
8月来室者 136名

会員異動

物故

大橋 晋(4824) 20・7・23
本望英紀(6672) 20・8・2
野澤隆一(6866) 20・8・13
神田典昌(9854) 18・10・23
神尾重則(10580) 20・8・12
安田 令(A0160) 20・6・23
退会

鈴木正規(4339) 福井
岩田継正(10031) 福岡
和田正信(10588) 福岡
中嶋 宏(13627) 山陰
薬師寺正憲(15481) 東九州
齋藤慎太郎(16045) 広島
中村良太(16419) 広島
石田陸人(A0206) 広島



I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆四国八十八ヶ所歩き遍路 逆打ち④徳島県 山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを、春2回秋2回での逆打ち。4回目は23番薬王寺から1番霊山寺で満願を達成します。

歩き遍路の経験豊富な四国八十八ヶ所霊場会の公認先達2名が遍路・巡拝・服装などの作法はお教えします。遍路用品は現地でも購入できます。お遍路はどこから歩き始めてもよいので、今回からの参加も歓迎です。申込み者には詳細案内を送ります。

日程 11月17日(火)～11月27日(金)

10泊11日

集合 11月17日(火)高知県甲浦駅。

集合9時30分。16日に前泊してください。

行程 17日＝甲浦駅―佐喜浜町

(泊) 18日＝海陽町(泊)

19日＝23番薬王寺―美波

町(泊) 20日＝22番平等寺

定員

10名(先着順)

歩程

1日20～30km余(健脚向き)
参加費1万円(通信費、写真代など)、1日1万円(宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代)、傷害保険は各自お掛けください。

遍路用品は約2万円。別途往復交通費。

ノ院(解散)

26日＝九度山駅―町石道

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

ノ院(解散)

―高野山(泊) 27日＝奥

申込み 11月10日(火)まで数見直
 TEL 090-7204-4668
 sanko@jac.or.jp

◆日帰りアルプス・シリーズ 第1回小鹿野アルプス

山行委員会

紅葉の季節に、変化に富み、それぞれが異なる秩父の低山を訪ねます。鎖やロープの難所がある釜ノ沢、岩稜のお舟と呼ばれる般若山、そして、秩父32番札所・法性寺へと歩きます。

日程 11月7日(土)

集合 西武秩父駅改札9時

解散 西武秩父駅16時30分(予定)

行程 西武秩父駅(タクシ)⇨長

若山荘前―兎岩登山口―

兎岩―竜神山―金精神社

―釜ノ沢五峰―長若山荘

―法性寺(タクシ)⇨西武

秩父駅(時間があれば一

浴)

装備 一般登山装備

費用 1000円(傷害保険料、通

信費など) タクシ代は

同乗者で清算

定員 8名

申込み 10月12日までに住所、氏

名、会員番号、生年月日、電

話番号、緊急連絡先を明記
 して杉崎敬子宛に。申込み
 者には詳細案内を送付し
 ます。

sanko@jac.or.jp

FAX 042-726-6984

TEL 090-1996-4110

◆自然保護講演会 参加者募集 のお知らせ

東京多摩支部

一般および会員向けに自然保護

の講演会を開きます

演題 「高尾山人気秘密と植生

の不思議」

講師 樹木医・森林インストラク

ター・石井誠治氏

日時 10月29日(木)18時30分

場所 立川市女性総合センター5

F第3学習室

定員 30名(先着)

参加費 500円

申込み 参加者全員の氏名、住所

の明記をお願いします。

問合せ 申込み先 10月23日まで

に、日本山岳会東京多摩支

部自然保護委員会 河野

悠二

TEL・FAX 042-544-4738

kyuuji@mwd.biglobe.ne.jp

*参加に際しては、マスクの着用
 をお願いいたします。

◆緑爽会創立25周年記念講演会 の開催日時・会場の変更について

以下のように変更となりました。

日時 10月24日(土)14時

会場 武蔵野スイングホール(武

蔵境駅北口すぐ)

*お間違えのないよう、お願いい
 たします。

『山岳2020年の訂正』

先ごろ刊行された『山岳202

0年版(第115号)の新入会員・

準会員(2019年4月〜202

0年3月)のページで、以下の方々

のお名前が脱落していました。こ

こに掲載させていただくとともに、

深くお詫び申し上げます。

*397頁上段、新入会員(20

19年11月)で辛眞談様165

59 埼玉支部、丸井弘美様16

560 東九州支部、丸井元江様

16561 東九州支部

*400頁下段、新入準会員(2

020年2月)で浅田稔様A0

311 埼玉支部、小島芽子様A

0312

『山岳』編集委員会

◆編集後記◆

●皆さんは書店で本を選ぶとき、
 どこを見て買う・買わないを判断
 しますか? もちろん書名と目次
 立ては大切ですが、私は著者の「あ
 とがき」を読んで決めます。一般的
 に「あとがき」は校正刷りが出そ
 ろった後に書かれることが多いの
 ですが、やつと一冊にまとめられ
 た、という著者の万感の想いが込
 められているからです。

●もし日本山岳会の図書室がな
 かったら、おそらく本書は世に出
 ていなかっただろう。」と、羽根田
 治会員の名著『山岳遭難の傷痕』
 の「あとがき」にあります。これを
 読んだことから、会報への原稿依
 頼を思い立ちました。羽根田さん
 も書かれているように、宝の持
 ち腐れにならないよう、ぜひ図書
 室のご利用を!
 (節田重節)

日本山岳会会報 山 904号

2020年(令和2年)9月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 古野 淳
 編集人 節田重節
 Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社